

歯科技工士が参画するコンサルテーションと ガイドドサージェリーシステム

佐藤孝弘 Takahiro Sato
新潟市中央区 / olive dental house
E-mail: main-post@olive-dental.com

米持 崇 Takashi Yonemochi
新潟市西区 / シンワ歯研

患者に最終的なインプラント補綴が装着される際に、
歯科医師として術前に想定していたイメージと少し異な
ると感じる場合がある。その時点で担当の歯科技工士に
改善を求めても、インプラントの埋入位置や埋入角度、
対合歯との対向関係、あるいは上部構造の材質等の問題
でこれ以上補綴形態は変えられないという事態に陥り、
患者も術者も妥協的に了承して補綴装置を装着する結果
となることもある。

したがって、術前から歯科医師と歯科技工士は補綴に
関しての意見を交換し、お互いに共通認識を持ったうえ
で十分に起こりうる結果を予測して臨む必要がある。し
かし、実際にはまだ不十分であり、システムとして確立
していないのではないだろうか。本稿では、初診時から
歯科技工士が関わったケースを通して、歯科医師と歯科
技工士との新たな連携を示し、最新のフルデジタルによ
るガイドドサージェリーについても紹介したい。

従来の治療システムで起こる補綴的問題

従来の治療システムにおいては、術前の診査・診断、
歯科医師だけに委ねられていたた

め、時として結果予測が及ばないことが起きうる。以下、
歯科技工士と連携することなく治療した結果、妥協的に
補綴した症例を供覧する (図 1 ~ 4)。

初診時、患者は上顎に総義歯を装着していたが、義歯
脱落感の解消のためにインプラントによる固定性ブリッ
ジを希望して来院した。手術術式や外科的な合併症につ
いてはインフォームドコンセントを行ったが、補綴的に
起こりうる可能性についてはあまり意識することなく、
術者としては外科が理想的に達成できるか否かにフォー
カスしていた。

インプラント埋入手術は問題なく終了し、その後以最
終補綴装置を装着したところ、患者からリップサポート
の不足による審美的な問題を指摘された (図 1)。その
後、試行錯誤しつつ頬側カントゥア等を調整してみたが
解消されず、結果的には唇側床縁を有するインプラント
オーバーデンチャーにせざるを得なかった (図 2, 3)。
最終的には患者の満足を得られたが (図 4)、術前の説
明とは異なり可撤式の総義歯タイプの補綴装置を再製作
することとなり、患者・術者共に妥協的な補綴治療を受
け入れるしかない結果となってしまった。

